



### 中国がわかるシリーズ 20

#### 東アジアの情勢と隋による統一(前編)

ライフネット生命株式会社

代表取締役会長兼 CEO、出口 治明

朝鮮半島では、6世紀に入って、新羅が徐々に強盛となり、高句麗の覇権が揺らぎ始めました。新羅の法興王(514~540)は、527年、仏教の公認を断行し、536年、新羅は初めて、独自の年号(建元)を定めたのです。次の真興王(540~576)は、領土拡大に努め、554年、百済の聖王(聖明王)を敗死させました。なお、これに先立つ、538年には、百済の聖王が、(最先端の情報、技術である)仏像と経論を倭国に贈ったと伝えられています(なお、仏教の倭国への伝来には後述するように多くの異説があります)。

[北]周を建国した宇文氏は、鮮卑の有力6部族の1つであり、尚武の気風を失ってはいませんでした。[北]周の3代、武帝は、574年、仏教、道教を共に禁止し(法難の第2)、577年には華北を統一しました。武帝は、滅ぼした[北]齊の人材も公平に活用したので、国力は充実し、中国の統一は時間の問題かと思われました。

ここで、目を北方に転じますと、北匈奴が、東漢によって弱体化した後の北方、モンゴル高原では鮮卑が強盛となりましたが、魏(三国)、晋の時代に、大挙して華北に移住してきましたので、その後の空白地帯を、高車、柔然が襲いました。5世紀から6世紀にかけて、ユーラシアの草原地帯は、東から西にかけて、柔然、高車、エフタルの3国鼎立時代が始まっていたと考えられています。これまでは、402年、柔然の族長、社崙が、初めて皇帝号として可汗(カアン)という称号を用いたとされていましたが、最近の学説では、この称号を最初に用いたのはどうやら鮮卑であるようです。[北]魏は、柔然との戦いがあったので、なかなか南朝攻撃に全力を投入することが出来ませんでした。

6世紀の半ば、草原地帯に異変が生じました。テュルク族の族長、土門に率いられた突厥という新勢力が台頭したのです。突厥は、まず、高車を滅ぼし、続いて、552年、柔然を滅ぼしました(柔然は、西走し、アヴァールとして、ドナウ河流域に大帝国を築きます)。土門は、伊利可汗と称しました。土門の弟は、西進し、サーサーン朝と結んで、エフタルをも撃破したのです。こうして、スキタイや匈奴、鮮卑に次いで、ユーラシアの大草原地帯は、突厥によって再統一されました。高車同様



## 長期投資仲間通信「インベストラ이프」

の狼祖伝承を持つ突厥はユーラシアで最強の軍事力を誇り、その後、約 200 年に渡ってユーラシア中央部を支配することになるのです(突厥は石人でも有名です。なお、突厥は建国時から、ソグド商人と密接な関係を有していました。テュルクの軍事力とソグドの経済力が、国の根幹を成していたのです。後に、唐の李淵が挙兵した際に、東突厥は兵を貸しましたが、ソグド人も深く係り、玄武門の変では、太宗に協力しています)。今でも、トルコ共和国は、552 年を民族建国の年としています。俄かに、強大な新勢力が北方に現れたので、対立する[北]齊と[北]周は、それぞれ、突厥によしみを通じてその歡心を買おうと努めました。578 年、華北を統一して国力を充実させた[北]周の武帝は、突厥に親征を試みましたが、志半ばにして病没したのです。